#212

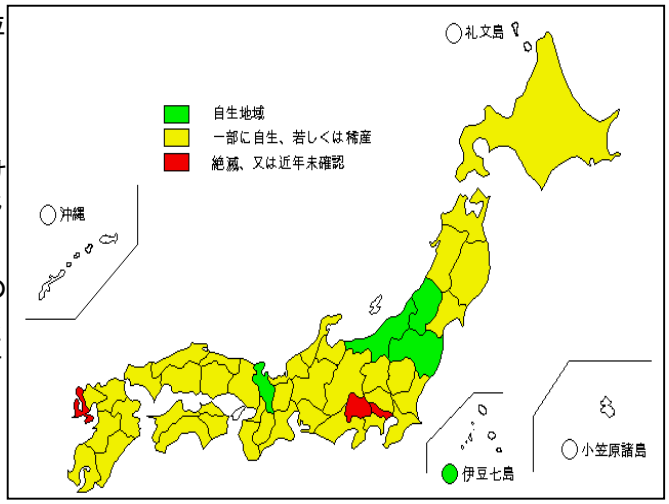
トキソウ

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

Pogonia japonica

トキソウ(愛知県東三河　09.5/30)

全国の明るい湿地に自生する小型の蘭です。サギソウと並び日本の湿地を代表する野生蘭で、中部地方では5～6月頃にピンクで可憐な花を咲かせます。地下に網の目のようにランナー状の根を張り巡らせ、その根の途中から地上部を伸ばします。4月末頃から成長をはじめ、草丈は15～30cm程度で1芽につき楕円形の葉を1枚と花を1輪だけつけます。冬季は地上部は枯死し地下茎のみで越冬します。低地の小さな湿原からかなりの高層湿原まで幅広く見られ、栄養の乏しい土地でモウセンゴケやハルリンドウ、ミミカキグサなどの湿地性植物と共に自生します。花色はその名の通り朱鷺色の淡い桃色で固体による変化は少ないですが、純白の固体も希に混ざって自生しています。大変観賞価値の高い野生蘭です。



全国の湿地に自生します。

トキソウ(愛知県東三河　09.5/30)

昔はほんとにどこでもみられた蘭でしたが、開発、環境の変化、盗掘の3大要因により今では保護地以外で見ることはきわめて難しくなりました。湿地はもともと平地に多く、人口の増加に伴い宅地化が進み、湿地は真っ先に埋め立てられ住宅地となり都市部を中心に加速度的に減少していきました。それと、もともと湿地は環境変化に弱く、富栄養化によるススキや笹などの大型植物の侵食で草原化し消失したり、水源であるため池や雑木林の消失による枯渇で消滅し続けています。また本種については大変美しく、花の時期には非常に目立ち、有名で人気があることから盗掘による被害もあとを立ちません。意図的な盗掘だけでなく、写真撮影者や散策者の踏み荒らしによる枯死も目立ちます。自然環境化で新たな湿地が生まれてくることは期待できませんので、何とか現存する自生地の保全を最優先に考え行動する必要があります。

Document and photo by LittleFlower 2009

本種は大変人気があり商用生産が盛んに行われているため、花の時期にはホームセンターで売っているほど入手は容易です。従来の桃色だけでなく、白花の選別品も安価で購入できます。 栽培も容易で潅水管理と成長期の日照確保さえしっかりできれば植替えをせずとも毎年元気に花を咲かせてくれます。花の時期がずれているサギソウと混生すれば、一つの鉢で長く楽しめかつ潅水管理もできる為おススメです。しかし悲しいことに、安価で出回り、さらに鑑賞できる時期が短いことから、花後は栽培放棄され枯れて捨てられることがほとんどです。折角の美しい野生蘭なのに、まるで使い捨ての如く大量生産、大量消費を繰りかえされるのを見ていると、商用生産による安価な供給も手放しに喜べることではないのかもしれません。 増殖も容易で、根の先や節からどんどん新芽を展開するので増殖率旺盛です。逆に実生での繁殖は自然界でもそんなに多くは無いようです。

トキソウの芽吹き(愛知県栽培品09.05/01)

トキソウ(愛知県東三河　09.5/30)

近縁種にはやや乾燥を好み、上向きに咲いて半開以上花弁を展開しないヤマトキソウがあります。ヤマトキソウは湿原にも自生しますが、山道脇の開けて明るく湿った場所などにも自生が見られます。トキソウほど大群落を作ることは少ないので、トキソウよりは実生による増殖に頼っているウェイトは多いようです。 また園芸店やホームセンターでよくタイリントキソウ(タイワントキソウ、ヒトツバラン)などの名称で売られている蘭は、トキソウとは全くの別種で台湾原産の半着生蘭です。どうやら花が大きくややトキソウに似ている？ことからこの名で呼ばれるようになったようですが、お店でもたまに「日本の野生蘭」として売られているのを目にします。

トキソウの群生(愛知県東三河　09.5/30)

トキソウ(愛知県東三河　09.5/30)

Document and photo by LittleFlower 2009